

「はっきり見えるようになる」 -マタイによる福音書講解説教 32-

詩篇 第27篇 1節～6節
マタイによる福音書 第7章 1節～6節

説教 岡村 恒 牧師

「まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう。」(マタイによる福音書 第7章5節)主イエスは、ありえないグロテスクな譬えを用いてお語りになりました。

この日、主イエスは「幸福なるかな、心の貧しき者」と話し始めて、その中で、主の祈りをお教えになり、全能の神に向かって「我らの父よ」と呼びかけて安心して求めてよいのだと教えて下さいました。今日の御言葉は、このような明るい話の間に入って唐突に「人をさばくな。」と響きます。主イエスは、自分を律し隣人との関係をきちんと整えて歩まなくてはダメだ、そうお叱りになったのでしょうか、いやそんなはずはない。神に喜ばれるような生き方を私たちができるとしたら、神のひとり子イエス・キリストが地上に来て、ましてや十字架に磔になって死ぬ必要などどこにもありませんでした。

「人をさばくな。自分がさばかれないためである。」(1節)もし人が自分の力で神の前に立たねばならないとしたら、私たちは絶望します。聖書によれば『さばく』と言うのは、神の前に立つと言う話だからです。神が私たちの魂の奥底までご覧になり、神があなたを『さばく』と聖書は断言しています。

あなたをさばき、あなたの隣人をさばくお方はただ一人、天の父だけだ。だから私たち自身で他人の人生や信仰、あるいは自分自身のことを量る必要などない。主イエスは聖書の中でも、きわめて異常なたとえをお用いになりました。あなたは兄弟の目にあるちりに気が付くだろう、しかし自分の目に家の屋根を支える梁が刺さっているのに気づかないでいる。神にその邪魔をしている物を取りのけていただかなければ、真実を見ることはできない。これが私たちの姿です。

後にキリストの使徒パウロと呼ばれるサウロが、ダマスコに行き、キリスト教徒を捕えて迫害しようと意気込んで歩いていると、「突然、天から光がさして、彼をめぐり照した。彼は地に倒れたが、その時『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか』と呼びかける声を聞いた。そこで彼は『主よ、あなたは、どなたですか』と尋ねた。すると答があった、『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』」(使徒行伝

第9章3-5節)この時からしばらくサウロは目が見えなくなりました。今まで自分が目に見ていた世界は、主イエスを排除し、主イエスの救いの約束などなかったかのように過ぎていく世界でした。しかしサウロは、神の言葉を聴き取り、心の目で神を見る体験をします。神に愛され、主イエスが生きて働いておられる世界をパウロは見るようになりました。

「聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。」(6節)福音の約束を理解しないものに投げ与えても無駄だ、そう読まれてきた聖書の言葉です。神はお創りになった世界を愛し保っておられます。創られたものは人間の様に愚かではなく、神が神であることを知っています。ここで出てくる犬豚は当時の社会でユダヤ人が、神を知らない異邦人をさげすんだ言葉からきています。思い違いをして、神無しに生きる者に対する警告であります。

神に信頼して歩み始める時、私たちはもはや自分の『はかり』で自分や他人を量る必要のないことを知らされます。神は永遠の命を用意し、私たちが心を開いて受け取ることを待っておられます。私たちの目を開き、信仰を与え、神に信頼して生きる者にしてくださいませ。私たちは神の救いの約束をしっかりと聞き取って受け止め、信じて歩むことができます。

もうあなたは自分自身をさばくこと、隣人を量ること、自分の目に罪の巨大な梁が刺さったままで生きることから解放されている。主イエスは、私たちに救いの約束をお語りになり、その実現の為に必要な一切の行動をなさいました。やがて終わりの日もう一度来てくださいます。誰でも主イエスを、救い主として信じる者は目を開かれます。信仰を持って生きるとは、神の招きが真実であることを確認し続けながら生きることです。1日1日、主イエスが私たちに語りかけ、信仰の旅を導き祝福してくださいませ。

やがて主イエスが再び地上に立たれ、新しい天と新しい地が完成する日まで、私たちは繰り返して、神によって引き戻され、立ち返って神を褒め称えながら歩むことができます。一切の絡みつく罪、不信仰から、主イエスは私たちを解放してくださいませ。神に信頼して生きる者へと創り変えてくださいませ。これが聖書の約束です。

(記 説教要約奉仕者)